

「労働の疎外」と「労働力の商品化」

—— 梯明秀教授の所説によせて ——

清水 正 徳

マルクス経済学は経済における人間関係の学である。その人間関係は物と物との関係となつて現われる。物との関係とは価値関係、商品関係である。しかし、それが物と物との関係になり切れないこと、このことが資本主義経済の矛盾となつて現われ、学的に認識され、やがて実践的立場における階級的自覚を基礎づけるのである。

客体化された唯物論のドグマによつて、天くだりにその論理の適用として平明単純なものに铸こまれた『資本論』の通俗的展開は、使用価値と価値の対立・矛盾の構造、商品——貨幣——資本の過程、さらに資本の蓄積過程における階級関係、等々をはじめ、すべての範疇の過程把握を客体的物質の二者斗争的展開に解消した。『資本論』の基本構造の把握において、自然弁証法的例証に支えられるしかないこのいわゆる「正統派」の弁証法から、われわれは何を学びえたであらうか。

マルクスにおける経済学とその基底にある哲学的立場を捉えなおすことは、こんにちますます重要な意義をもつてゐる。対象化された経済学的諸範疇、このいわば物的過程とみえるものの底に、労働の基本構造とその歴史

的形態との関連を見究めることは、マルクスにおける理論と実践の根本的な相関を確かめることでもあるのだから。

以下の私の論考は、まことに大綱的であり、見方によっては冒険的な試論というべきものであって、今後まだ彫琢されるべき多くの試練を要するものである。しかし、決して一朝一夕のものではなく、永年にわたって少しずつ確信を深めてきたものであるので、このえがたい機会にあえて祖述させていただくことにした。

梯教授の深く精力的な哲学的思索からは、私も日頃まことに貴重なものを与えられてきたのだが、ここにはむしろ私が支持称揚したい点は留保し、思い切って疑問とするところをさらけ出すこととなった。教授の御教示を乞いたいと思うのである。

一

ヘーゲル、フォイエルバッハの哲学との相関を明確に示しながら、マルクスの哲学の確立を保証し、また、われわれがエンゲルスやそれ以後のいわゆるマルクス主義唯物論によってマルクスの哲学の根本が蔽われることを正確に排除してくれる鍵は、彼の「労働における人間把握」ないし「労働における現実の基本構造の把握」である。われわれは、これが学的に厳密な位置づけを与える叙述を『資本論』特に第一卷第五章第一節「労働過程」にみるのであるが、その若々しく自由な哲学的表現は『四四年手稿』特にそのヘーゲル哲学批判の部分にみることができる。

労働こそ人間を他の動物と自らを分つ点である。マルクスはこのことを強調する。蜘蛛や蟻も計画的に労働す

るではないかという反論を設定した彼は「しかし彼らは目的をもたぬ」という。人間だけが労働すなわち能動的行動において目的をもち、これを実現すべく客体的物質に働きかけることができる。目的 *telos* とはまさしく行動の指針となるべき観念である。アリストテレスは目的因 *causa finalis* をもって四原因の一となし、ただし人間の行為を存在一般の運動において見るならば、これは形相因 *c. formalis* に帰するものとした。マルクスにおける労働を考える場合も、この目的を絶対視し、一元化すれば、まさしく目的論、形相論すなわち観念論にいたるであろう。

しかし反面、労働を肉体としての物質、労働対象としての物質、一般に物質の運動として捉えることが正しいか。これが「物質の主体的自己運動」などといわれてもしよせんはおなじことである。物質を第一存在として措定しそこから労働を展開する以上、「主体的」などということじたい、ただ事がらを曖昧にするだけである。

労働を正しく労働として捉えるためには、目的を対象化し、これによって自分自身を対象化する主体は無とされなければならぬ。もとよりマルクスが無とよんでいるわけではない。彼はただ、観念論でも唯物論でもなく人間主義Ⅱ自然主義の立場としていただけである。しかし、これを観念論、唯物論という存在論に対して人間学をもつて応じるものとするのでなく、やはり存在論の規定をもつて応じるとすれば物質とか精神とかいう有の立場ではなく無の立場であるとするしかないのである。現代唯物論者たちの無概念嫌悪と、これをいえばただちに観念論と直結させる頑迷さは驚くべきものだが、マルクスにおける労働の概念は、その根本性格が物質とか精神とかいう有概念から規定できぬ構造をもっており、論理的に捉えようとすれば無という規定をあえてしなければならぬのである。労働の主体は、可能態として「質料」と捉えてもよいが、アリストテレスでは、ついにはこの質

料も形相から見られた質料として、存在論的には「形相の質料」とされることになる。質料の質料、すなわち第一質料が純粋な質料として捉えられる立場はむしろ行為の立場、労働の立場であり、これを見る立場より規定すれば無とよぶしかないのである。もしこれを無とせずして物質とするならば、物質はすなわち有であり、これがすべての運動の原因として合理的に捉えられ、現実を説明する存在とされる以上は、これは形相であるといわねばならない。それは可能態としての質料ではなくなってしまう。

マルクスは観念論による真理の逆倒に対して徹底的にきびしくあろうとしていたのであって、その否定面、批判的な面から積極的な自分の立場をうち出すべき転回点を、まさしくこの「労働」において捉えているのである。ここで再びマルクスの物質観が確認されねばならぬ。人間は肉体をもつ自然存在 *Naturwesen* として、地上に生き、空気を呼吸し、自然物を食べて存在しており、そのように存在せざるをえないから労働もせざるをえぬ、という物質的自然による絶対的規定を受けている。さらに、目的をもって労働するといっても、目的が実現するか否かについて、対象の自然必然性という絶対的規定を受けている。しかし、麦の量的な過程的増産を試みるとか、品種の改良、農耕具の改良などは、すべて人間が客体的自然の属性につきながら、その都度目的をもって労働し、自己対象化としての労働生産物のうちに自己を肯定的に、また否定的に確認しつつ展開されるものである。マルクスは人間の肉体としての制約と労働対象の客体としての独立を強調し、この制約のもとにある人間の立場にたつて、ヘーゲルの『精神現象論』を終始「絶対的思惟活動、論理的思弁的思惟の生産史」として批判する。しかし、このように決定的な物質の制約を前提しながらも、マルクスの労働を物質の決定論の上に捉えるわけにはいかない。存在論としての唯物論に首尾一貫せしめることは、まさしくマルクスの労働論の根底にスピノザ

の神ないし自然の必然論をおくことである。それはマルクスが人間存在の基本構造として、労働の物質とのかかり、そしてそれを目的をもった自己対象化としての構造として捉えたことが、すべて普遍的存在観のうちに解消されてしまうことになるからである。

「ここにおいてわれわれは、徹底した自然主義ないし人間主義が観念論とも唯物論とも異なっているということ、そして同時に、これこそ両者を統一する真理であるということ」を知るのである。「Wir sehen hier, wie der durchgeführte Naturalismus oder Humanismus sich sowohl von dem Idealismus, als dem Materialismus unterscheidet und zugleich ihre beide vereinigende Wahrheit ist. ⁽²⁾この統一された真理にどつてそれぞれその一面となつている観念論と唯物論の意味は明らかとなつた。行為の主体、労働主体は肉休であり、対象は人間の意識から完全に独立した物質であるということを認めることは明らかに唯物論を認めることである。精神、イデーから離れたものとして考えられる物質は全く虚妄であるとし、イデーがそこに自らを確証した自然のみを有とするところの観念論、すなわち物質を完全に精神のうちに包摂する観念論とはっきり対決している。人間はこの物質の第一次的存在性をはっきり前提し、自然に対する受動性、動性を確認してかからねばならない。マルクスはこの面をフォイエルバッハから受けとり、よつてヘーゲル哲学から自由となつた。

しかし、一方客体的物質の運動をもつて人間の行為、労働を基礎づけることはできない。人間の活動、労働が一般に物質の運動とか、他の動物の活動から自らを分つものは目的をもつた活動ということであり、労働による自己対象化ということである。これこそ人間の自然に対する能動的な側面である。マルクスはこれを再びヘーゲルから学びとり、フォイエルバッハの直観的唯物論ないし直観的な疎外論の立場を克服した、とはいへ、ヘーゲ

ルにおける労働はマルクスもたたえるように人間の「対象化が対象性喪失ない自己外在化であるとともに自己外在化の止揚であるような過程」³⁾として捉えられているが、しかしその労働の決定的な特性は、自己が自己自身の真の姿を自覚してゆく過程だということである。疎外の回復は自覚ということであった。労働における目的性が絶対化されると能動性の主体が精神として絶対化され、究極は絶対的観念論に到達せざるをえない。

精神、イデーを存在とするヘーゲル哲学の労働観が、やはり疎外された哲学のものであるとすれば、逆に自然そのものを存在として、その自然自体が自己疎外し自己回復してゆく過程として労働を把握することはできないであろうか。これは根本的にいわゆる弁証法的唯物論の構造をもったものであり、この後のマルクスがこの方向に進んだという考えに従うならば、マルクスはいまや唯物論の一步手前までできていることになるわけである。

しかし、究極の問題があくまで現実の人間であるところのマルクスにとっては、彼の哲学の立場を客観的決定論のうちに解消することがそう容易に行なわれる筈はない。このことは前に検討したとおりである。と同時に、この主体的な労働把握が多くの困難な問題にぶつかり、マルクスにこれらを克服しつつ進むことを要請するのである。

まず、彼の労働の本質観から、進んで労働の現実形態に対する彼の捉え方を考察してゆかねばならない。

マルクスは、労働の構造をただその本質的構造において抽象的にのみ捉えようとしたのではない。それどころか、この本質的構造も「現実の事実」としての「疎外された労働」の底に考えられたのであって、彼自身が解明し克服したいこの現実こそが究極問題であったわけである。そしてこの労働の疎外の諸規定(労働者の、労働生産物からの疎外、労働行為からの疎外、類的存在 *Gattungswesen* からの疎外、自然からの疎外等々)については西欧でもわが

国でも近年実に真剣に論じられてきた。しかしいまの私は、このことに詳しくかかわっていることはできない。私の問題の焦点は、この労働の疎外ということでどれだけのことが明らかとなったかということ、それも特に労働の論理構造の把握について、である。たとえば、国民経済学からマルクスが「とりあえず」受け入れた諸事実、諸概念（私有財産、労働、資本、土地の分離、また労賃、資本利潤、地代の分離、さらに分業と競争、交換価値等々）について、「この外部的な、一見して偶然的な諸事情が、どの程度まで必然的発展の表現であるのか」⁴）についてマルクスは概念的展開をすることができたのか。「この点に関して国民経済学は何ひとつ教えない」と彼はいい、その理由は彼らが「運動の連関を概念的に把握しないから」であって、だからこそ「たとえば独占の理論に対しては競争の理論を、閉鎖組合の理論に対しては営業自由の理論を、大土地所有の理論に対しては土地領有の分割の理論をくり返し対置するだけ」⁵）だという。しかしながら、マルクスもこの手稿を通じてくり返し国民経済学を批判する一方、自分が諸事実を「概念的展開」として「必然的発展の表現」として捉えようとし、更には、「どのようにして人間は彼の労働を外在化させ疎外するようになるのか。どのようにしてこの疎外が人間的発展の本質にもとづいているのか」と自ら問うているが、これが積極的に展開されているであろうか。彼は右の文章に引き続いて「我々は、私有財産の起源という問題を、人類の発展行程に対する外在化された労働の関係という問題に転化したことよって、この課題の解決のためにすでに多くのものを獲得した」といい、その理由として「私有財産という場合、人間の外部の事物が問題だと信じられているから。」と述べている。たしかに、私有財産を客体的に捉えた従来の経済学への懐疑は鋭いものであり「労働という場合には、直接に人間自身を問題としなければならぬ」として、人間の労働による対象化→外在化、疎外という関連において捉えようとした意図は卓抜で

ある。しかし、これだけのことで「この新しい問題提起はすでにその解決を含んでいる」とまでいい切れるであろうか。そしてこの含まれた解決は一向に展開されないのである。なるほど、私有財産の起源の問題を人類の発展行程に対する外在化された労働の關係の問題に転化するということは、彼の唯物史觀への視界が開かれつつあることを示しており、おなじ『手稿』の中の二、三の個所にこのことをうら書きすると見られる文章はある。しかし、唯物史觀の視角と、疎外論として基礎的な経済学的諸範疇の連関が概念的に展開されるということとは決して統一され支え合うものとはならない。それどころか、唯物史觀が方法論的に自覺的なものとなるやいなや、疎外論として経済的現実の把握はとどめを刺されることになるのである。

ここで反論があるかもしれない。完成された唯物史觀をもって、生産力と生産關係の矛盾發展として歴史的社会の諸形態が解明され、諸々の階級社会の基本構造が明らかとなったとき、それぞれの社会における労働者の疎外構造はいよいよ刻明に捉えられ、労働主体とその疎外の諸形態を把握することによって階級としての主体的自覺をいよいよ強くすることができないか、と。それは、次章でみることにしよう。しかし、それはいま私の問題にしてきたことから逸脱した反論である。私のいいたいことは、疎外の論理は経済的な「現実の事実」を概念的展開として捉えうる論理であつたか、ということである。ないしはありえたか、ということである。

マルクスは「国民経済的な現実の事実から出発する」として疎外された労働の規定に入ってゆくすぐ前の文章で、経済学者たちが現実を解くためまず「架空の原始状態に身をおく」のを批判し、このような理論的設定は何ごととも説明せず、問題をただ「灰色の漠然とした遠方へおしやるだけだ」といっている。そして「それは、論証すべきことを、すなわちたとえば労働と交換のような二つのことからの間の必然的関連を、事実、出来事とい

うかたちで隠蔽している。」といっているが、こういったときのマルクスは、労働と交換の必然的関連を論理的に展開しなければならぬと考えていなかったであろうか。そして『手稿』を通じてこのことの積極的な過程が、そのいとぐちさえもが見られるであろうか。彼は、経済学者たちが「原始状態」を仮構して現実を解こうとすることを「神学が悪の起源を墮罪で説明するのと同じ」だとし、それは「みずから説明すべきことを、事実として歴史のなかにかくしこんでいる」と皮肉っているが、彼自身、現実から出発して「疎外された労働」の諸規定を明らかにした後、彼自身の根本的な設問「どのようにして人間は彼の労働を外在化させ疎外するようになるのか」に対してどのような推論の根拠をつかんだであろうか。答は「否」である。

私が、なぜこのように若干のマルクスのしかも未定稿の諸断片に関して、これほど際だった問いと答をかまえてゆかねばならないかについては、後に明らかにすべきことを期するしかないが、ここで論考をひとつ展開させてもよいと思う。即ち、私はくり返しマルクスの意図に対して、その成果の消極性を強調してきたが、私がここで結論的なことを先取していえば、この手稿におけるマルクスの論理は根本的にはフォイエルバッハと同じものだということ、それは自己疎外と自己回復の論理につきる、ということである。もとより、私はマルクスがフォイエルバッハから決定的に自分をわかったもの、即ち労働的人間の立場を忘れたわけではない。それは前に分析し強調した通りである。しかし、この労働主体としての人間の把握とこの立場の自覚ということ、現実の労働の疎外構造との関係は全く別個のこととしてあり、前者から後者へは決して概念的に展開できない、ということを私はいつているのである。フォイエルバッハが宗教的疎外の根拠を人間に見究めようとしたように、マルクスも労働的疎外の根拠を人間に見究めようとした。そして、疎外されない労働の構造を彼はヘーゲル批判の過程で

たえず構想し、一方フオイエルバッハから原像をえた「類的存在」の概念をもって人間の社会性、普遍性の面を捉えようとしたのである。しかし、労働主体としての人間からも、さらにこれを類的存在としての人間の労働として捉えてたことから、疎外を必然的に展開はできない。可能性を契機として見ることはできても必然性を論証することはできない。私は、マルクスが疎外されない労働から疎外された労働を論理的に展開し、さらに現実的な経済学的諸範疇の全体的連関をも論理的に捉えようと考えていたと推断するのだが、このことは労働を疎外させる本質、この歴史的本質との関係を捉えなければ不可能である。『手稿』におけるマルクスにとって疎外された労働は私有財産という所有形態との関係で捉えられているが、私有財産という階級社会に一般的な所有形態との相関においては、到底、賃労働者の労働の疎外を経済学的範疇の総体との必然的関係において展開することはできない。私有そのものはむしろ静的な形態とみるべきであって、私有の本質が労働を疎外させる根拠とみることができず、これを無理に行なえば所有欲史観とでもいうべきものによって現実を基礎づけることにもなりかねない。マルクスは勿論このようなものとは無縁であるが、ともあれ、疎外を経済的現実の全体を学的、概念的に把握する原理とする、ということは疎外されない労働、人間に本質的な労働の構造を始元とすることによって不可能であり、私有を原理とすることによっても不可能である。

労働の疎外といわれる構造の全体を経済学的範疇の総体との相関において論理的に展開させる本質は、労働を社会的生産として形態づけ、たえずこれを循環過程として自己運動体の現象たらしめている本質である。それは価値増殖過程、資本蓄積過程の本質としての資本であり、より抽象的にいえば自己増殖する価値である。労働者が「より多く生産すればするほど、彼の生産の力が増大すればするほど、それほどますます彼は貧しくなる」と

か「労働者の生産物が、疎遠な存在として、生産から独立した力として労働に対抗する」といって労働生産物の労働者からの疎外を説いても、労働が「労働者に対して外的で」あり、「労働者は彼の労働において自分を肯定しないで否定する。幸福でなく不幸を感じる。……だから労働者は、労働の外部ではじめて自己のもとにあると感じ、労働のなかでは自己のそとにあると感じる。……労働は労働者自身の喪失である。」⁽⁸⁾と云って労働行為そのものの疎外を説いても、それは現実の、資本主義的賃労働の概念的把握とはいえない。なぜなら、労働の人間に、とつて本来的な属性を奪いとして、自己の増殖の過程のうちに包摂し、自己運動を展開する歴史的形態の本質を概念的展開の軸とすることによって、初めて国民経済学的事実の全体を必然的発展の体系として捉えることができる、と思われるからである。

マルクスが『手稿』において疎外論として開示している論理構造は、彼が国民経済学者たちを批判することばとして、「独占理論に、対して、競争理論を……対置させる」だけだという指摘を不幸にして彼自身にも招くことにはならないだろうか。すくなくとも、フォイエルバッハの宗教における人間の自己疎外と自己回復の論理構造とのアナロジーは決定的である。ここで、ヘーゲルの弁証法も自己疎外と自己回復の論理ではないか、といわれるかもしれない。しかし、ヘーゲルは理念を存在としながら、この理念が現実的諸形態の本質となつて展開する、いわば理念と現実との二元的統一の展開である。理念はどこまでも現実の形態をとおして展開する。フォイエルバッハはこの哲学全体を自己疎外の立場となし、マルクスも『哲学手稿』でこの批判的立場を貫いているが、後のマルクスから省みるならば、ヘーゲルが理念を存在としている根本をば疎外の立場として棄て去るばかりでなく、現実の諸規定の連続的、概念的把握をも棄て去り、現実形態をその歴史的本質の概念規定において捉える根

拠をも棄て去ってしまったことになるわけである。

マルクスが、フォイエルバッハの偉大な業績として、哲学を「思惟で遂行された宗教」であり、従って「人間存在の疎外の一形式」として断罪しなければならぬとしたこと、を指摘していることはよいとして、次にそのフォイエルバッハが「真の唯物論と实在科学とを基礎づけたこと」を挙げて、これは、彼が「『人間に対する人間』の社会的な関係を理論の基礎原理とすることによって、絶対に肯定的なものであると主張する否定の否定に対して、自分自身の上にたち、積極的に自分自身に基礎をおいている肯定的なものを対置することによって」なされた、とのべていることは実に示唆的である。⁽⁹⁾マルクスが偉大な業績としているフォイエルバッハの理論の基礎原理は、類的存在としての人間社会の原像であり、これと積極的に自分自身に基礎をおいている肯定的なものとの相関において理論的認識が成立するのである。尤も、マルクスは、フォイエルバッハの「否定の否定」に対する考え方にあき足らず、ヘーゲル哲学を疎外の立場とする彼自身の見方から、これをなんとか活きたものとして捉えなおしたいような意図をもったことがうかがわれるのであるが、それも疎外論の立場からは蹉跌せざるをえなかったわけである。ヘーゲル哲学を疎外の体系となすフォイエルバッハの立場は徹底した過程的弁証法放棄の立場であるが、マルクスもフォイエルバッハの感情的直観の現実観から労働の対象化の現実観へ自己発展しているとはいえ、労働の形態を歴史的に規定している本質を捉えようとせず、ひたすら疎外現象の諸属性を開示し、ヘーゲルが「労働の本質として、人間が自己を確証する本質として捉え」、労働の「肯定的な側面ばかりみて、否定的な側面をみない」と批判するとき、批判そのものは正しいとして、マルクスが労働の疎外において喪失面を捉えようとするあまり、喪失させているものを捉えようとする態度を見失っていたことは確かなようである。そ

してこのことの根柢は実は疎外論の立場、人間主義⇌自然主義的主体の立場と密接に結びついているのである。ここで、しつこいようであるが断っておかねばならない。疎外論の立場は、彼の労働主体の立場の確立と結びついて、マルクスにとっては根本的な「現実の主体的直観にもとづく実践哲学の立場」である。しかし、実践の主体性が確立したことが、直ちに現実における真実なる実践を保証するものではない。私は、この疎外論の立場、マルクスの実践主体の立場から積極的には現実の学的認識は展開できないのであり、現実における真実なる実践が客観的なものとなりうるための否定的媒介たる学の立場と方法の確立には、まだ決定的な展開がとげられねばならなかったのではないか、ということを手想しつづ論考してきたわけである。

- (1) MEGA, I/3 S. 160「訳」大月版 選集、補巻四、四〇八頁。
- (2) 同上。
- (3) a. a. O. S. 156「訳」四〇三頁。
- (4) a. a. O. S. 80「訳」二九七頁。
- (5) a. a. O. S. 93「訳」三一五頁。
- (6) 同上。
- (7) a. a. O. S. 82「訳」二九八頁。
- (8) a. a. O. S. 82ff.「訳」三〇一―三頁。
- (9) a. a. O. S. 152「訳」三九七頁。

二

疎外論の立場の限界を自覚しながら、なおこれを唯物史観によって克服（学的認識の原理的立場として）するまで

に至っていない過渡的段階にあって、この頃のマルクスに於けるヘーゲルとフョイエルバッハの關係が微妙にうかがい知られる資料は一八四五年の春書かれたとされている『フョイエルバッハに関するテーゼ』である。

これは、マルクスによって書かれたものうち最も広く読まれているものの一つであるに拘らず、細部については必ずしも明快に受けとられていないものである。

フョイエルバッハの直観的唯物論に対しては、『手稿』において既に自分の労働主体の自己対象化の構造解明をとおして自分の立場を峻別している。このテーゼの各所にわたって、宣言されているフョイエルバッハとの訣別の鍵も、まさしくここにある。ただ、『手稿』や『聖家族』では、自分の哲学的立場を人間主義ないし自然主義として、時にはこの立場こそ観念論と唯物論を統一する真理とよんでいるのであるが、この諸テーゼでは明確に自分の立場をもフョイエルバッハのそれと共に唯物論として捉えていることが特徴的である。ところで、この自然主義から唯物論の自覚的に展開したことは何を示すのか。人間の労働の基本構造把握についてはおそらく何の変化もあるまい。労働を物質一元論的に客体化することはマルクスにおいては終生見られない。フョイエルバッハ唯物論に立つては「ただ理論的な態度だけを真実に人間の態度とみて、反対に(唯物論的な)実践は、ただそのけがらわしいユダヤ人的な現象形態においてのみ捉えられ、固定されている」⁽¹⁾と批判するとき、マルクスは唯物論的实践を根本的には『手稿』において把握された労働をそのまま考えているわけである。ただ、彼は唯物論にたつことによって現実把握の過程的な面を確保したい意図をもっているように思われる。人間の活動的な面が、抽象的にはあっても唯物論と反対に「観念論から展開された」といってヘーゲルの積極面を述べていても、それは内容的に既に『手稿』において確認されていたことだといえるし、また、宗教的自己疎外の秘密は「ただ

現世的基礎の自己潰裂と自己矛盾とから説明下さる」という指摘も、いわば『手稿』の頃のマルクスの志向が既にこれを裏がきしていたといえよう。彼が唯物論を自分の立場とすることによって、歴史の過程的な面と、人間の活動、感性的実践とをなんとか統一的に捉えたいという意図がうかがえるのである。

すなわち、彼はフォイエルバッハが「宗教の本質を人間の本質に解消して」いるが、「人間の本質はなんら個人に内在する抽象体では」なく、「現実には人間本質は社会的諸関係の総体である。」と批判し、ここで「社会的諸関係の総体」という歴史的視角を明らかにしている。この社会的諸関係といわれるものが「類」として「多数の個人を自然的に結合する普遍性として捉えられ」た社会関係でないことは、同じテーゼでこれをフォイエルバッハのものとして彼が批判していることよって明らかである。このことはフォイエルバッハ批判であるとともに彼自身の自己批判でもあった筈である。また、彼が、フォイエルバッハは宗教的情操を「歴史的過程から抽象して、それだけとして固定し、かつ一の抽象的・孤立的・人間的個体を前提している」として、歴史的過程から人間の抽象を批判していることも、同じく前年の自分自身への自己反省をも示すものではなからうか。さらに彼が、『宗教的情操』そのものがひとつの社会的生産物⁽³⁾であり、フォイエルバッハが分析した「抽象的個人が一定の社会形態に属する」ものであることを強調しているのを見ると、我々は、ここからマルクス自身の思想体験として賃労働者の労働が一定の歴史的社會のもとにあるものであり、個々の労働者の疎外された労働は一定の社会形態に属するものであることを、『手稿』の頃からはるかに深く捉えようとする態度の推移が読みとれるのである。

しかし、はげしく変革的な実践主体の立場を主張しながらも、「一切の社会的生活は本質上実践的である」と

説く反面、依然としてその実践の社会的形態との結びつきは明確でなく、古い唯物論と新しい唯物論の立場を、ただ市民社会と人類社会の対比において表現するあたり、まだ歴史的意識が確立しているとはいえない。すなわち、やがて現実が『資本論』として体系的に認識されるための方法的前提ともいうべき唯物史観も未だ確保されていないというべきである。

彼は、労働において存在の基本構造をつかみ、それが現実のかたちとしては全くその本質を転倒させられていることを直観した。そしてこれを実践的に回復するしかないという根本態度を確立した。

唯物史観は、いわば、この労働の基本構造の把握と、現実形態におけるその転倒とを、ただ本質と現象との対立的措定すなわち疎外されない本来的労働と疎外された労働、という抽象的関係においてでなく、人間の歴史の事実をたどって、人間の労働がどのような仕方、形態をとってきたかを歴史的社会の人間関係、階級関係のうちにおいて確認しようとしたものである。

疎外がどうして人間の本質にねざしているのかを、労働主体性の立場、すなわち自然主義Ⅱ人間主義から展開することは不可能であることを自覚して、これを「事実としてはどのようにして」からまず明らかにしようとし、この解明を、自らの哲学的真理の側面とした唯物論的視角のうちに求めたといつてよい。それは歴史をば経済的次元を基軸として捉えることによって、労働の現実形態を歴史のうちに認識し、よって現実における実践の主体の科学的媒介にしようとしたわけである。「一切の歴史叙述は自然的諸基礎および歴史の過程における人間の行動によるそれらの諸基礎の変化から出発しなければならぬ。」⁽⁴⁾ われわれの出発点たる諸前提は、現実的

な個人、彼らの行動、および所与のものとして見出された彼らの物質的な生活諸条件、ならびに彼ら自身の行動によって作り出された彼らの物質的な生活諸条件である。それ故に、これらの諸前提は純粹に經驗的な仕方で確かめうるものである。⁽⁵⁾ さきに、労働の基本構造において、労働主体が受ける自然からの絶対的制約について考察したが、マルクスにとつて唯物史観はまさしくこの自然的制約としての歴史の制約、人間が必然的に歴史の中に定位せざるをえないことによる制約を捉える方法論である。これは現実の労働主体にとつて、自然的制約が絶対であるように、必然的過去によつて投げ出されるという制約は絶対的であり、従つて唯物史観を認識の方法論とか視角とかいつても、それは単に任意なもの、相対的なものではなく、まさしく「現実の絶対的制約」という基礎にたつ方法論である。また、だからこそ後年の経済学的研究にとつて「導きの糸」としての役割を果したのである。「人間が彼らの生活資料と生産する仕方は、まず第一に、所与のそして再生産さるべき生活資料そのものの性質に依存している。」⁽⁶⁾ こうしては彼は社会的労働の歴史的なあり方をたしかめてゆこうとするわけである。

『ドイツ・イデオロギー』はその題名の示すように、ヘーゲル左派のイデオイギー性に対する酷烈な批判の書であるが、これは彼自身のうちにある左派的な要素への手きびしい自己批判の結果できあがったものでもある。そしてこのことは、マルクスにとつて左派の人たちが非常に見すばらしくみえてきたと同時に彼がヘーゲルから決定的なものを再発見したことを示している。いうまでもなく、それは歴史ということであり、過程的認識とということである。「ヘーゲルは実証的な観念論を完成した。彼にとつては全物質的世界が一の思想世界に、そして全歴史が一の思想の歴史に転化したばかりではない。彼は思想的事物を登録することをもって満足しない。彼はまたその生産活動をも叙述しようとつとめた。」⁽⁷⁾ マルクスは、唯物史観によつて経済的事物の生産活動を叙述

しようとした、ということができらるであらう。しかし、彼のこの唯物論的な歴史の見方は、彼の労働主体の哲学を包摂しつくすものではない。それは人間にとつては必然的な制約、すなわち「第一の前提」であるところのものを歴史において「確認」すべき歴史観である、といわねばなるまい。「われわれは、……すべての人間的存在の、それ故にまたすべての歴史の第一の前提を、すなわち『歴史を創り』うるためには人間は生きてゆくことができねばならぬという前提を確認することをもって始めねばならない。』⁽⁸⁾そして彼が、歴史叙述をひとつの唯物論的土台 *eine materialistische Basis* の上におこうとしたことは、このすべての歴史のひとつの根本条件を確認しようとしたことに他ならない。「生きてゆくには何はさておき、食うことと飲むこと、住うこと、着ること、その他なお若干のものが必要である。従つて最初の歴史的行為は、これらの欲望を満足するための手段の生産、すなわち物質的生活そのものの生産である。しかもこれは人間の命だけをつなぐために、今日もなお、数千年前と同様に、日々刻々遂行されねばならぬひとつの歴史的行為であり、日々刻々充足されねばならぬすべての歴史のひとつの根本条件である。』⁽⁹⁾労働は客観的には生産であるが、労働主体が社会的生産者としてどのような制約の中にあつて労働しなければならなかつたかをマルクスは確認する。このことによつて、彼は「共産主義的唯物論者として産業と社会組織を变革」せざるをえぬ実践、主体的、「必然性」の上にたちながら「同時にその条件をみる」、すなわち労働生産形態の歴史的展開においていわば「労働疎外」の客観的制約を「条件」として認識しているわけである。「現実において問題なのは、現在の世界を革命することであり、既成の事物に実践的に働きかけてそれを変化することである」が故に、その条件はどこまでも「現実的な、歴史的な人間」の歴史として認識されねばならないわけである。

こうして、歴史は生産力の発展と生産様式、生産関係との照応、矛盾として、古代より一般史的に見通されるわけであるが、当然のこととして終始労働生産者の社会的在り方に焦点がおかれており、これが特に分業、私有財産と密接に結びつけて見られている。そして諸産業、交通、人口、土地所有、国家、法等々との関連が意識されながら総合的な歴史叙述にまでもってゆこうとされているのである。しかし、事実としては、草稿的な段階におわっているといつてよく、歴史学的認識としても晩年のエンゲルスが語っているように資料的な不足と偏りがあるようである。

また、疎外論的立場は極力表面に出ないように自制されているに拘らず、(彼は「疎外」ということばを使うとき、わざわざ「哲学者たちにわかる言葉をつかえば」⁽¹⁰⁾とことわっており、また「疎外の過程」として歴史をみる哲学的意識をきびしく批判している)、単に左派の人たちを批判する場合のみならず多くの哲学的規定がはたらし、労働を自己活動 *Selbsttätigkeit* とよんでこの自己活動が、現実の形態にまで制約される過程を「精神的活動と物質的活動の分裂——分業」、との関連で説明しようとし(「分業による諸々の人格的な力(関係)の物的な力への転化」⁽¹¹⁾等)、おさえるべくもなくその主体的立場が顔を出している。そして歴史の必然として規定されるべき共産主義社会も、やはりそのものへ革命すべき人間関係として形象化され、そこにおける充全なる労働、生産のあり方が謳いあげられている。若いマルクスにとって、唯物論的な歴史の把握も、もともとは現実把握にひきつけるべき媒介としてのものであり、根本的には労働主体性という実践の主体の立場に媒介すべきものであるだけに、このような些か不統一にみえる歴史への態度もけだしやむをえぬことであつたであろう。

ともあれ、彼が意識的に統一して歴史を捉えようとした態度は次の文章にほぼ要約されている。「この史観が

よつてたつ根拠は、現実の生産過程を、直接的な生活の物質的生産から出発して展開し、そしてこの生産様式と連関しそれから産出される交通形態を、従つてまた種々なる段階における市民社会を、歴史全体の基礎として把握し、そしてこの市民社会を国家としての活動において叙述し、ならびに意識の種々の理論的産出物と形態との全体である宗教、哲学、道徳等々を市民社会から説明し、それらの成立過程を市民社会の種々の段階からあとづけるということである。⁽¹²⁾そして「現実的土台」*reale Basis* そのものの矛盾的發展とその意識の關係についても、いくつかの個所でかなり手のこんだ説明がなされているが、結論的には「彼らがそのもとに生産する特定の条件は、矛盾がなお出現していない間は、彼らの現実的な被制約性に、彼らの一面的な存在に相應する、そして彼らの存在の一面性は矛盾の出現によつて初めて自己を顕わにするのであり、従つてただ後代の人々にとつてのみ存在するのである。そのときにはこの条件は一の偶然的な桎梏として現われ、そしてここにおいて、それは一の桎梏である、という意識が前代にも転嫁されるのである。」⁽¹³⁾というようにかなり難解に表現されている。『経済学批判』序文における唯物史観の公式的叙述の意味するところと、「人間は自ら解決しうる問題をのみ問題とする、云々」といわれている矛盾の自覚に関する把握も、ここに殆んど完全に自覚されているというべきである。

要するに、私がマルクスにおける唯物史観の把握と、彼がこれにもとづいて歴史の土台、すなわち生産次元の歴史的發展を認識すべく志向したことから受けとる根本的な点は次のことであつた。

疎外論の立場は、学的認識の方法を直接には基礎づけることのできない立場、非連続的の主体の立場、無の立場であり、従つてこの主体的立場に歴史的認識を、しかも人間存在の「第一前提」としての歴史的生産形態の認識を媒介すべき方法論的立場は、唯物論的歴史観にたつ「最初には自己活動の諸条件として現われ、後にはそれの

諸桎梏として現われる種々の諸条件⁽¹⁴⁾」の現実的な認識というべきものによってのみ獲得される、という結論を示している。

ただし、彼はこれによって自らの主体的立場を必然史観の中に解消したのではない。ヘーゲルでは概念展開が現実の歴史の展開だとされるのに対して、生産の歴史の形態の展開が歴史の土台だとされることは、現実の主体的立場に対する条件、前提として認識されているのであって、この土台を決定論的存在論的存在としたわけではない。彼ははじめからここに労働疎外の必然性の始元を求めたわけでなく、社会的労働の疎外化を生産諸条件の桎梏化とする過程的認識、そしてこのものを「純粹に經驗的な仕方では確かめられる」諸資料にもとづき、生産諸条件の歴史的過程として認識しようとしたのである。

こうして彼は、「テーゼ」で確認したフォイエルバッハの限界を、現実認識の側面においても克服した。諸テーゼの文章をもじつていえば、これは「歴史的過程から抽象」された疎外された労働を「この現世的基礎の自己潰裂と自己矛盾とから説明」する途を拓いた、ということが出来る。そしてこれは明らかに「人間の活動的な方面」を、転倒したかたちにおいてではあれ、歴史において展開したヘーゲル哲学の真価の再発見にもとづいている。しかし、銘記されねばならぬことは、マルクスが「対象、現実、感性」を「感性的、人間の活動、実践」として捉える自分の立場を「主体的」とよんでいることである。この根本が見失われるならば、四四年『手稿』で積極的に展開されていた彼の哲学的立場が、現実認識的方法的立場としては「哲学的意識の清算」として克服されねばならなかったことが、主体的立場としても克服、清算されねばならなかったもののごとく誤解され、マルクスの労働主体性の立場が歴史の必然論の中に解消されてゆくものと捉えられる危険に陥るわけである。

本来的な労働の構造と、労働の現実形態としての「疎外された労働」の諸規定との相関を、唯物論的歴史把握によって媒介し、裏づけしようとするマルクスの志向は、生産を、特に分業の展開のうちに生産条件の極端化というかたちで捉えられた。そしておそらく『手稿』の頃の自分をも含めて、人間の本質を「分業のもとに包摂されぬ個人」として「理想的に」捉え、分業に包摂された人間への「全過程を『人間』の自己疎外の過程として把握されたのだが、このことは、本質的には後の段階における平均個人がつねに前の段階にまで推しおよぼされたことに由来する。」と批判している。⁽¹⁶⁾しかし、歴史の分析において、彼はやはり生産力を労働力を含んだ客観的潜勢力として、生産条件特に分業過程との関係で捉えている底に、自己活動としての労働の本質構造が先取されており、共産主義を極端の極限に必然的なものとしてうち出そうとして「絶対に必要な実践的前提」としての「生産力の発展」⁽¹⁷⁾を刻明に叙述しようとする試みながら、やはり共産主義を「完全な自己活動への還帰」とよび「自然生的な前提を意識的に従来の人間の創造物として取扱う」社会、「自己活動と物質的生活とが合致し」「個人が全体的個人へ発展する」⁽¹⁸⁾状態、として捉えられていることは、明らかに「生産力と生産関係」の相関による唯物論的歴史認識の底を破った主体的把握の支えの現われとみねばならない。たしかに、彼自身もいうように「共産主義はわれわれにとって、作り出さるべきひとつの状態、現実がそれに則るべきひとつの理想ではない。われわれはいまの状態を止揚する現実なる運動を共産主義とよぶ。この運動の諸条件はいま現存する前提から生れる。」⁽¹⁹⁾とされるのだが、にも拘らず、それは唯物論的必然史観からのみ捉えられる構造ではない。この史観は、あくまで労働主体性の立場からの現実の把握と実践というマルクスのデモーニッシュな関心のうちに、「条件」

としての媒介的役割をおびたものとしてののみ、われわれに了解できる。

ところで、少くとも、「疎外は人間の本質にいかん根ざしているのか」を概念的に展開すべきだという問題も、問いそのものがまちがっているという考えに至つたようだが、ではこれをいわば「いかに疎外されてきたか」と問題にかえ、彼はこれを生産諸条件がいかん桎梏化してきたかという問題におきかえて、どのようにこれに解答をあたえたであろうか。分業、交通形態(内容の晦渋な範疇!)、私有財産、土地所有、国家等々との関係をみながら歴史的資料について叙述されている「現実の土台」の内容について、私は各所にちらばっているこの種の叙述を整理することも、その歴史学的真偽を云々することもできない。ただ、彼がこの「どのように」に対する答えのうち、現実の生産諸条件によって労働者の受ける桎梏をどうしても捉えかねている決定的な面を見てゆきたい。

「社会的な力、すなわち分業において制約された種々の個人の協働によって生ずるところの倍加された生産力は、この協働そのものが自由意志的でなく、却つて自然生的であるために、これらの個人にとつては、彼ら自身、結合された力としてでなく、却つて一の外的な、彼らの外にたつ強力として現われる、この強力について彼らは、どこからきてどこへ行くかを知らず、従つて彼らはそれをもはや支配することができない、反対にそれはいまや一の固有の、人間の意志と実行とから独立な、いな、この意志と実行とをあたかも支配するところの一系の様相と発展段階とを進んでゆく。」⁽²⁰⁾そして彼はこの「疎外」は二つの実践的前提のもとにのみ排棄されるとして、その二つを「人間大衆を全くの無産者として生み、かれらを、現存する富と教養の世界に対する矛盾において生み出すほど」の、そして「この大衆の動きを世界史的なものとするだけ交通を世界的なものとするほど」

の「生産力の発展」をあげている。もともと「自己活動の諸条件として現われた」ものが、分業によって、労働者階級にとって桎梏として現われたから、これを排棄して自己活動を回復しなければならぬ、というだけのことであればそれでよい。また、桎梏化過程を捉え、これを克服することが必然であり、これは分業の、従って私有財産の排棄ということにならざるをえぬ、というのであれば、これも直線的生産力史観ともいうべきものであって、それはそれとしてよいであらう。しかし、問題は、直線的な矛盾の激化過程とその克服をただ必然として展開することではなく、現実の分業そのものの内的性格を確かめるといふ方向にも進まざるをえないはずである。

分業そのものが桎梏ではなくその社会的性格が桎梏の根拠であるということが、生産過程の内的構造において解明されるのでなければ、これを克服するといふ場合の内的諸条件が少しも明らかにならないのではないか。資本主義を变革することが、たとえば農民一揆のようなものでなく、また市民革命のようなものでなく、人類最初の「意識的な革命」だと後年のマルクスがいう意味が、变革さるべきものの根本条件を完全に認識している革命ということである以上、この内的構造の解明は絶対に必要なのである。しかも、このことはいまのマルクスの方法視角からは積極的に遂行できないということが、自覚されてゆかざるをえないわけである。事実、マルクスが桎梏としているものの内実は、彼がさまざまにその属性を分析するに拘らず、合理的に認識されてはいないものである。

それは『手稿』における「労働そのものの疎外」という規定にかかわってくる。労働が「自由意志的でなく、却って自然的である」のは何によるのか、彼らが「どこからきてどこへゆくのか知らず、従って彼らがそれをもはや支配することができぬ」強力、これは分業そのものによるのであろうか。そこには分業を特性づけている

内的法則があるのではないか。この内的法則が分業をして、労働する者のすべての力に「人間の意志と実行とから独立な、いな、この意志と実行をあたかも支配するところの一系列の様相と発展段階を進ま」せるのではなくるか。彼の、蓄積された労働——資本——私有財産という考え方は、結局は労働を基礎にすえながらこれが私有財産に定着する矛盾として捉え、資本が社会的生産の主体となり、労働の社会的性格を決定する面をみようとはしていない。彼は小産業および農業と分業的工業との対比として次のような特性を列挙しているが、これはこの時期における彼の総括的な経済の見方を示すものとして特徴的である。

(小産業と農業)

- 一、個人は連繫されていなければならない。
- 二、自然的な生産要具にあつては、個人は自然のものに包摂される。
- 三、財産(土地所有)もまた、直接的な自然的な支配として現われる。
- 四、個人が、家族であれ、種族であれ土地そのもの等々であれ、なんらかの紐帯によって一共同体に結び合っていることを前提とする。
- 五、交換は、主として人間と自然との間の交換であり、前者の労働が後者の生産物に対して交換されることの交換である。

「労働の疎外」と「労働力の商品化」(清水)

(分業的工業)

- 一、個人は与えられた生産要具とならんで自身生産要具として存在する。
- 二、個人は、労働の一生産物のもとに包摂される。
- 三、財産は、労働、特に蓄積された労働、資本の支配として現われる。
- 四、個人は、彼らが互いに独立であつてただ交換によつてのみ結合されていることを前提とする。
- 五、交換は、主として人間自身の間の交換である。

六、平均的な知識で充分であり、肉体的労働と精神的

活動とはなお全然分離されていない。

七、所有者の非所有者に対する支配は、人的諸関係に、

一種の公共組織に基礎をおくことができる。

六、既に、精神的労働と肉体的労働との間の分業が実

践的になしとげられていなければならない。

七、所有者の非所有者に対する支配はひとつの第三の

もの、すなわち貨幣において一の物的な容態をとって
いなければならない。⁽²⁾

分業が資本と二元的といつてよいほど併行して捉えられ、交換ということも、その浸透をただ交通形態の発展との関係でだけ捉えている。貨幣経済と交通形態との相関的發展についても各所で触れられているが、貨幣をそれだけの形態にとどまるものとして捉えるにすぎない。

私は、唯物史観にたつて歴史的認識に集中する若いマルクスに対して、完成した経済学的認識の要素が乏しいことを露呈し、その指摘自体を意味があるものとして決してない。私は、ただ、『手稿』における立場が学的認識の立場としてぶつかるアポリアを明らかにし、これを克服すべき、歴史的過程の唯物論的認識が、やはり生産力と生産関係の相関史としてのみあるかぎり、労働主体性の立場から要請される現実的、学的認識としては、一面的、というより更に、その中より現実の実践的認識の立場が飛躍的に要請されてくるべき前提的認識という意味をもつ、という限界を明らかにしようとしているにすぎない。

工業において労働はなぜ一生産物のもとに包摂されるのか、個人が互いに独立であつて交換によつてのみ結合され、これが労働をも人間自身の間で交換させて、所有者と非所有者との関係を、第三のもの、すなわち貨幣において一の物的な容態をとつて進められることになるのはどういふ経済構造の自己運動のもとにおいてであるか、

には未だ眼が向けられない。それは「財産」が「労働」しかも「蓄積された労働」としての「資本の支配として現われる」ということだけによっては、一向に全体の運動の認識とはならないのと同じである。だから、分業による「資本と労働の分裂」という前提のもとにおいてのみ存立するという「労働」の解明は、実は「疎外された労働」と根本的には全く同じ規定の反復におわらざるをえないのである。

「第一に、生産力が個人から全く独立、かつ切り離されたものとして、個人とならんで存在する一の独自の世界として現われる。」だから「一方の側には諸生産力の一総体がたち、これらの生産力はいわば一の物的姿態をとっており、個人自身にとつてはもはや個人の力ではなく、却つて私有財産の力であり、従つてただ個人が私有財産所有者である限りにおいて個人の力であるにすぎない。」労働者からは生産力は切り離されており、「従つて彼らはすべての現実的な生活内容を奪われて抽象的な個人となっている。……彼らが、それを通じてなお諸生産力および彼ら自身の生存とつながっている唯一の連関たる労働は、彼らにおいては自己活動のいっさいの外観を失つてしまつて、ただ彼らの生活を不快ならしめることによつて、彼らの生活を単に維持しているにすぎない。」⁽²²⁾こんにちにおいて、彼らの自己活動と物質的生活の生産の分離は、「一般に物質的生活が目的として現われ、この物質的生活の生産すなわち労働（これがいまでは自己活動の唯一的に可能な、しかし、否定的な形態である）が手段として現われるという姿をとっている。」⁽²³⁾まづたく疎外論の規定である。

労働者が「いっさいの現実的な生活内容を奪われて抽象的な個人になっていること」その抽象性はどのように明らかにされるか。「物質的生活が目的として現われ、この物質的生産すなわち労働が手段として現われる」循環過程の秘密は何か、そして物質的労働だけがいまでは自己活動の唯一の形態しかも否定的な形態である、とい

うのはどのような法則性のもとにあるということなのか。この認識は、生産力とか分業とかの発展という具象的視角とは全く次元の異った認識を要請するものではなからうか。彼が疎外として捉えた諸規定は、これに至るまでの事実としての歴史的裏づけをえたというものの、依然として現実の矛盾の構造としては明らかにならない。労働行為そのものの疎外として表現されたもの、さらに「類的存在からの疎外」として表現されたものの根底からの把握は、やはり唯物史観による歴史的認識では積極的に展開できないのである。

- (1) MEGA I/5 S. 533「訳」三木沢、三一頁。
- (2) a. a. O. S. 535「訳」三三頁。
- (3) 同上。
- (4) a. a. O. S. 10「訳」四七頁。
- (5) a. a. O. S. 10「訳」四六頁。
- (6) a. a. O. S. 10「訳」四七頁。
- (7) a. a. O. S. 565「訳」三八頁。
- (8) a. a. O. S. 17「訳」五六頁。
- (9) 同上。
- (10) a. a. O. S. 24「訳」六七頁。
- (11) a. a. O. S. 63「訳」一一頁。
- (12) a. s. O. S. 27「訳」(唯研版)三〇―三二頁。
- (13) a. a. O. S. 61「訳」一一八頁。
- (14) 同上。
- (15) a. a. O. S. 533「訳」三一頁。
- (16) a. a. O. S. 59「訳」一二七頁。

- (17) a. a. O. S. 24 「訳」 六七頁。
(18) a. a. O. S. 38 「訳」 一二七頁。
(19) a. a. O. S. 39 「訳」 六六頁。
(20) 同上。
(21) a. a. O. S. 56 「訳」 八八―八九頁。
(22) a. a. O. S. 57 「訳」 一二四―二五頁。

III

現実の労働において、労働そのものの社会的目的性が見失われ、社会的人間の連帯性が断ち切られている、という意味の疎外は、むしろその労働の社会的性格を「自然的」なものとして「意志と実行から独立なもの」として現象させる根拠を捉えるべく要請するはずであった。それは、いわば現実、世界全体の疎外的本質の発見、すなわち自己増殖する価値としての資本の発見、によって体系的把握の基礎を獲得する。自己増殖する価値としての資本が主体となつて行なわれる自己運動すなわち資本の価値増殖過程として社会的生産が行なわれていること、マルクスがこのような把握に達するのはまだよほど後のことである。しかし、問題は、ひとりひとりの個人は意識的に行動しているに拘らず、その社会的性格は根本的にある盲目的法則に規定されている、というその根本法則の認識が、マルクスの主体的立場、そして唯物史観的認識とどのような関係にたつて成立するものであるか、ということである。

労働の自己活動性をすべて価値の形態のうちに包摂し、「労働者の物質的労働を全くの手段たらしめる」資本

は、しかし決して資本家の恣意のもとに考えることはできない。彼は、マルクスのいうように資本の「人格化」⁽¹⁾としての範疇であるにすぎず、資本の客観的自己運動の担い手であるにすぎない。商品のもつ使用価値と価値の矛盾が展開の原動力となり、貨幣の成立による価値の独立、そして「貨幣としての貨幣」は何ものとも交換する定有として、やがては自己増殖を展開するもの、すなわち資本という形態に転化する。マルクスが『手稿』で疎外された労働として捉えた労働の現実形態は、この資本形態が、社会的労働⇋生産過程を自己の価値増殖過程のうちに包摂すること、として認識される。流通過程としての価値増殖過程がここに実質をえて資本の生産過程、再生産過程となるわけである。

ヘーゲル哲学では、概念が歴史を貫くものとしてこれと統一的に捉えられ、従って絶対的な哲学の体系となり、しかも概念、イデーが根本存在とされるために観念論の体系となった。資本主義経済の原理としての価値は、まさしく資本主義社会という歴史的事実が自らを規定する本質概念である。従ってこの概念の体系は歴史的科学の体系となる。しかしこの概念の展開がただちに歴史の展開ではない。また、ここでは概念といってもそれ自身で自足し展開するものではなく、どこまでも歴史全体の抽象という性格をもっている。しかもこれは歴史的事実の過程の反映というわけにはいかない。反映論としては、歴史が資本主義という純経済的原理を体系的に反映しているもの、とでもいうしかないものである。この体系なし方法全体の反映ということを、もう少し内容にたち人って考えねばならない。

商品、貨幣、資本の形態は、資本主義的商品経済のもとにおける労働生産物にとって物神である。人間が生産物を交換することによって現象したこの価値の形態が、やがて最高の普遍的存在となつてすべての人間を支配す

るにいたるといふこの物神性は、いわば人間が自ら播いた種より始まったとはいへ、觀念世界のことではなく、まさしく現実世界における物神化過程である。そしてこの量的規定の形態は、人間の経済的関係の内部における生産物の社会的性格の対象化であり、それはやがて、完全に質を、使用価値をば、量の、価値の、質料的担い手として支配するにいたる。価値形態すなわち交換価値は一つの定有として貨幣となるが、等価形態の觀念性は依然として貨幣の本質でありやがて資本の本質でもある。それはある使用価値体が自らの価値を他の使用価値体へに投影することなしには自らの価値を表現できないという商品世界の本性にもとづいており、貨幣はこの等価物として投影される形態としての觀念性をその本質としている。商品、貨幣、資本という形態は、まさしく人間が生活者として物質とかかわる世界、すなわち経済的世界における労働生産の社会的対象化、疎外であり、投影であるものの定有化、独立化であるといふことができる。資本主義における資本の定有は、この対象化された規定性がみずから歴史的本質存在となつて社会の総生産を自ら掌握下におくことを意味する。

ヘーゲル哲学におけるイデーは、マルクス体系においてはまさに価値であるが、経済学原理論としての『資本論』ではこのものはその歴史的形態の本質であることを自覚しつつ展開されるが故にヘーゲルにおける絶対的始元「有」をもつて展開されるのではなく、形態の最も抽象的な規定から流通形態論として展開され、この展開が労働Ⅱ生産という実体を把握して進む過程として明らかにされる。すなわち、歴史的形態のロゴス体系としての自覚の上に成立している原理体系として、これはまさしく科学である。しかし、もとよりこれは実証的、経験的諸科学の一としてのものではない。歴史的主体としての人間がすべて現実の歴史の本質の原理的認識として、自らの主体性の絶対的媒介とせざるをえない決定的性格をもっている。すなわち、ヘーゲル哲学、フォエルバッハ

のいわゆる「疎外された体系」としての哲学は、マルクスの労働主体性の哲学的立場から「現実の原理的体系」として、しかも現実における観念論批判の論理体系としての科学に分化、発展したことができる。科学として徹底することは、労働主体性の立場からみれば、徹底的に逆倒した世界の形態的合理性とその自己矛盾の露呈ということである。これが、経済学原理論が経済的土台における完成した疎外の体系、現実世界における観念論（資本こそ、価値こそ実体とする立場）の貫徹とその自己批判の体系、だという意味である。

資本主義的商品の根本性格を原理的に体现しているものは、労働力という商品である。マルクスのいわゆる「原基的定有」⁽²⁾ *elementarisches Dasein* としての原基形態 *Elementarform* はむしろ労働力商品として把握されねばならぬ。尤も、そうだからといって、資本主義の原理的認識が労働力商品を始元（端初）としなければならぬということには、必ずしもならない。ただ、上のことの把握によって端初の商品の性格が、さらに商品から貨幣、資本への展開の論理的意義が当然きびしい規定を受けてくることになる。

社会形態の如何をとわず、人間の労働力は如何ようにか支出されて社会生活の消費資料を生産してきた。また商品は、共同体間の交換によるものとしてのその発生に歴史的な始めをもっているが、いわゆる「ノアの洪水以前」から存在し、資本主義成立以前すでに各共同体の発展段階に応じて興発しつつ、しかも決して社会的生産の形態となることなく、もっぱら流通部面において自己の形態を現象させていた。そして、この流通部面における形態としては、商品は貨幣、資本へと展開していた。だが、資本の形態といってもどこまでも流通におけるものであって、その価値増殖過程も実質に支えられたものではなかったのである。

資本主義以前における労働生産の諸形態と、商品―貨幣―資本の流通形態とは、歴史的にも、また論理的にも

統一して捉えることはできず、一応純粋に二元的に考えるべきである。このことは、さきの唯物史観による歴史把握の意義とその限界の考察からも明らかである。原理的に捉えられるべき対象が、歴史一般ということではなく、また商品経済社会一般ということでもなく、「特殊的に歴史的な」資本主義社会であることが、この論理的な厳密さを要求するものといえるのである。

労働力の商品化こそ資本主義の存在を原理的に確証する。これは論理的には、商品—貨幣—資本の流通形態が社会的に労働生産過程を把握するということであり、ここに初めて商品生産が社会的生産の形態として確立されたことを示す。商品経済は一社会を総体的（生産・流通・分配）に貫徹することとなり、単に如何ようにか生産されたものが商品となるというのではなくて、商品は労働力という商品が生産するものとなり、労働者は自分の労働力の価値としてえた労働賃金によって自分の生活資料を買わねばならぬという必然性の中に入る。

私は、先年、マルクス初期の自己疎外論の発展、その論理的構造を、『資本論』の「価値形態論」のうちにてこれを検討した。⁽³⁾これは、単なる商品の流通形態の展開のうちに、すでに自己疎外の論理構造がつきとめられることを明らかにしたのである。質としての一使用価値体が商品という形態をうることにより、必然的に価値という量の形態へその主体性を疎外してゆく過程を価値形態論は実に正確に示している。

商品はその生産に必要な労働を含むからこそ価値をもつものとして現われるのであるが、その価値は実は交換（流通）という「廻りみち」Unweg⁽⁴⁾をとがしてしか自らの価値を現象させない。そして、この「廻りみち」こそ生産物の質（使用価値）を量（価値）の形態に転化させる必然性を論理的に明らかにし、ここに商品の価値形態による質的主体の量的客体への自己疎外が露呈される。しかし、かりに、社会がこのような商品の流通の基礎

に単純商品生産という構造をもっているとすれば、この商品流通による価値規定の「廻りみち」はやがて生産と交換のくり返しと、生産者の自由な移動というものの介して均衡・調整され、各自によって生産されたものが価値通りに売られるという、いわゆる「単純商品社会」となって落着いてしまうことになる。そしてこの均衡状態の持続においては、商品生産は速かにその価値規定を受けとり、いわば社会がその盲目的意志によって価値にもとづく労働の分配を行なわしめているかのような現象形態をとるのである。

古典経済学をして資本主義社会の歴史性、その自己矛盾を洞察せしめなかつたものは、勿論彼らが生きた資本制の段階による制約はあるのだが、彼らが一方で「ロビンソン物語」による意識的労働分配を価値把握の要素とし、他方で単純な商品生産・流通社会を資本主義社会と本質的に同一視しながら、根本に価値世界の調和・均衡を確信したことに他ならない。勿論、単純商品社会の均衡を仮構して考えても、そこで質的主体の量的客体への自己疎外を否定しうるものではないが、だいたい価値形態論によって自己疎外の論理を確かめる場合、この背後に社会的労働主体を考えるならば、常に上のような単純商品社会を**実質的支柱**として考え形態論の意義を見失う危険をはらむことになるのである。

われわれは、そこに疎外の論理を見ようとするためのために、形態論の原理的、体系的意義を見失う危険につねにさらされていることを自覚し、形態論が疎外論の発展としてもつ根本的な限界を明確にしていなければならぬ。マルクス自身、一般的価値形態ないし貨幣形態の成立をもって価値形態論に於ける一の決定的次元を確立させてはいるが、しかし勿論、流通形態はこの貨幣の成立をもって完成したり均衡したりするものではなく、貨幣形態はその「貨幣としての貨幣」の反省過程をへて資本へと論理的に展開するのである。

価値形態において自己疎外論の発展をみることは、流通形態における自己疎外の論理をみることである。つまり資本主義的自己疎外にとっては可能性として捉えられる疎外、いわば流通主体における疎外の論理をみることである。『資本論』としては、価値形態論における疎外論は生産主体の疎外としてではなく、明確に流通主体なしし流通における商品所有者としての主体の疎外とみるしかなく、その背後に労働生産主体を考えれば、どうしても資本主義ならざる一般的商品生産社会をその地盤として考えねばならぬことになってしまう。

資本主義における労働主体は賃労働者である。彼らは労働力しか売るものがない人間として、他方資本家は資本ないし生産手段を私有するものとして市場に現われる。ここに資本の基本的流通形態 $G \rightarrow W \rightarrow G'$ が、労働生産過程をその中に把握して産業資本 $G \rightarrow W \rightarrow P \rightarrow W' \rightarrow G'$ が成立することとなる。

労働力は「人間の身体、生きた人格の中に存在する身心の能力の総括として、彼がなんらかの種類の使用価値を生産する場合には、常にこれを使用するものとしてある」⁽⁵⁾のであるが、これはもともと商品として生産されたものではない。本来商品として生産されたのでないものが、商品経済の貫徹としての資本主義において決定的な要素として組み込まれる。それも、マルクスのいうように、この労働力は、なんらかの使用価値を生産することができない、という歴史的前提によって必然的に商品化されるのである。資本家は他のすべての商品に対しては、その生産を把握して支配することができるが、労働力商品だけは自らの資本をもって生産することはできない。たとえば資本の有機的構成の高度化による相対的過剰人口として、相対的な規制力をもつことができるにすぎない。すなわち、労働力商品は資本家が資本の価値増殖過程、その循環過程において、その都度自由に量的調整をなしえない唯一の商品、資本主義における唯一の単純商品として存在する。

資本家は、この労働力という商品の使用価値の生産的消費としての労働によって、初めて価値増殖を実現するのであるが、この労働、生産の過程をも自己の価値の増殖における一の物的過程として捉える。本来商品でなく客体的物質でないものが、物化して捉えられ、客体的物質の過程の中に解消して捉えられるところにこそ資本主義的矛盾の細胞のかたちが見られるのであり、社会の総体的生産がこの労働力の商品化を基礎として行なわれるところに、人間の自己疎外はその必然的かつ現実的構造を明らかにすることになるのである。

労働力商品は賃金で買った生活資料を個人的に消費して再生産されるものであって、それは彼らの労働の直接の生産物ではない。また資本家が売る商品も、もとより商品として買った生産手段と労働力との生産的消費によってえたものであって、資本家自身の労働の生産物ではない。しかもこの相関は、直接の生産者を労働生産者として現われさせず、却って生産者でない資本家が商品の生産者として現われるというかたちをとることになる。だから商品交換は全く物としての商品として観念させることになるのである。人間が自分のつくったものに支配される。労働力商品化による資本の生産過程は、労働主体の自己疎外ないし物化を客観的根拠のうえに完成する。マルクスが『資本論』において商品・貨幣・資本の物神性として剔抉しているものがこれである。

以上で明らかになったように、資本主義経済構造の根本的性格は、その細胞形態としての「労働力商品」に体现される。従ってこのものはその経済構造の根本的矛盾の細胞形態でもある。

このことから、資本主義的矛盾の現実形態も、原理的には当然この労働力商品化を根拠とすることが洞察できる。世界史上でみられる各国の資本主義の発展とその爛熟化は、それぞれの国、それぞれの段階で異った様態を示しているが、純粋な資本主義構造を把握しようとする原理論においては、その原理性が段階的な様態によって

ゆがめられぬよう警戒しなければならない。資本はどこまでも自己増殖する価値であることをその本質とし、この本質を貫徹すべく自己運動するものである。そして、現象的には自己矛盾の現われとみえるものでも、たとえばそれが歴史的にしばしば現われた事実であるとしても、資本が自己のうちにそれを調整しうる可能性をもつものは、資本主義的矛盾となしてはならない。また、資本主義社会の階級性を意識すると共に、われわれの方に労働者階級こそ生産の、従って社会の眞の主体であるとする立場が強く現われて、ともすれば二元次的な経済的不均衡をも必然的矛盾のように主張することが起ってくる。それどころか資本主義社会においても、まるで労働者がインシャティヴをとって社会的生産を行なっていると誤認しているのではないかと思われるほどの暴論も現われてくる。

マルクス自身が、商品における使用価値を価値の「質料的担い手」といった意味において、資本主義における労働＝生産は、資本の価値増殖の質料的担い手という性格をおわされていることを原理的に確認してかからねばならない。

また、「自然史的過程」とか必然性とかの乱用によって、資本家が自己展開に明らかに不利であると自覚することができれば自己訂正しうる事態をも、いわば盲目的に不均衡や対立激化の方向へ突進してゆくかの如く説き、必然性の名によってその論証をごまかす場合も起ってくる。たとえば、資本の有機的構成の高度化を原理的に必然的なものとみて、労働者階級の窮乏化を絶対的な法則としてみることは支配的な説となっているが、マルクス自身もそうまで一方的な推論はしていないのである。価値の自己増殖を本質とする資本は、その貫徹のためにつねに有機的構成の高度化を展開せざるをえないことはいえない。

資本が自分で調整ないし訂正を行ないうると認められる混乱や停滞は、あくまで二次的なものとして資本主義の根本的矛盾から排除しなければ、本質的な現実と偶発的ないし末梢的な現象とが混同されてしまう。あげくは、資本主義をいたるところ対立や矛盾だらけのものとして、その構造をも、従ってその止揚をもあまくみてしまう結果に陥り易いのである。

資本が資本として自己運動するかぎり、必然的に現実化してくる矛盾は周期的恐慌である。これこそ資本主義の必然的な自己批判ともいふべき現象であつて、この矛盾の必然的な拡大再生産の出現によって資本主義はもはや歴史的な生産関係としてその生産力に適應するものといえないことを、自分の原理的構造のうちに立証するのである。

ここに恐慌の根拠を労働力商品から展開することは省くしかないが、この恐慌に関しても、その原理的構造を労働力商品のうちから展開しない説が広く行なわれている。エンゲルスによつて資本主義の根本的矛盾とされ、これにもとづいてレーニンが恐慌の根拠となしたところのもの「生産の社会的性格と所有の私的性格との矛盾」がそれである。しかし、これは厳密な資本主義の構造から規定したものというよりは、むしろ商品生産一般に伴う矛盾といふべきものであつて、およそ商品経済の行なわれる社会はつねに恐慌の可能性をもつが、そのような起りうる恐慌一般の根拠といふべきものである。また、この根本的矛盾とされるものとの連関から『資本論』第二巻の「再生産表式」をとり上げ、恐慌発生の直接の動因として生産部門間の不均衡をあげるとも通説のようになつてはいるが、これも、實際上は、しばしば恐慌現象の契機となつてはいるとはいへ、いわば偶然的契機といふべきものでここから周期的な必然性を論証できるものではない。マルクスも、右の個所で、生産部門間の不均衡が

恐慌の契機となることを述べているが、その必然性の根拠として説いているわけではない。もともと『資本論』における「再生産表式」は、いかなる社会においてもなんらかの形式で行なわれざるをえない社会的再生産の資本主義的形式を表式化したものであって、この表式自体はなら資本主義的矛盾の要素を含むものとして説かれていたものではない。この表式から生産部門間の不均衡をとりあげて恐慌の根拠を説こうとするようなことは、いわば木によって魚を求めるの類である。

資本主義の根本的矛盾は、「労働力商品」のうちに始元的に包含され、このものを根拠とする周期的恐慌のうちに現実化されることが論証されること、このことが資本主義の原理的把握の枢軸であるとすることは、当然『資本論』を、首尾一貫した読みとり方によって再構成することを求めることになるのである。

資本主義の矛盾を商品社会一般のもつ可能的矛盾のうちに解消してはならないが、その意味においても、資本主義の原理的認識が、全体系の論理的前提としての流通論（商品—貨幣—資本）を、純粹な形態論として、もたねばならないことは承認されると思う。商品社会一般の矛盾は、あくまで可能的矛盾であって、社会の基本構造と結びついてその内部から必然的に現実化するものではない。商品の流通した資本主義以外の如何なる社会も、その商品社会たることによる矛盾の故に、商品社会たることを止揚したことはなく、資本主義社会となって初めて商品経済社会として全面的に自己貫徹したことがよく考えられねばならない。資本主義社会は、その「特殊的に歴史的な」社会たることの根本矛盾をまず原理的に把握することによってのみ、その総合的認識が展開されることになる。そしてこの原理的基礎に立ってこそ、やがてこの社会の止揚の条件も、正しく把握されることとなるのである。⁽⁶⁾

- (1) 『資本論』第一版序文。
- (2) 『経済学批判』首章冒頭の文章。
- (3) 「自己疎外論の発展」（神戸大学文学部機関誌「研究」第二三号所収）「実体と形態」（玉城他編）「マルクス経済学体系」（岩波）上巻所収。
- (4) 『資本論』岩波文庫版、第一分冊、一〇五頁。
- (5) 同 第二分冊五二頁。
- (6) 現在、私は資本主義の原理的把握に関して、宇野弘藏教授の理論体系に共鳴せざるをえないのであるが、この章の一部の叙述は、私なりに受けとったかぎりでの教授の基礎理論に拠るところ多いことをお断りしておく。なお、この章の一部分として既発表の論文（神大「研究」第二八号所収の「労働力なる商品の論理的性格」）の一部分をほとんどそのままの文章で挿入したことをお断りしておく。これはただ、経済学の分野での叱正をえたいという意図によるものである。

四

梯教授が「疎外された労働」につきながら、教授のいわゆる「労働人間」から「単なる労働人間」へ、「自己活動的な生命的な自己対象化」としての労働から「疎外された労働」への関連を論理的、概念的に追求しておられるのはまことに興味ぶかい成果の一つである。といっても、教授が前者から後者を演繹的に展開しておられるわけではない。教授は、マルクスが『手稿』で再三のべたように「国民経済的な事実」として疎外された労働を措定し、その構造もマルクスの規定につきながら展開されるのであるが、ただその展開はマルクスの行なっているような直観のないし疎外批判的な視角におけるものでなく、まさしく『資本論』を予想し、あたかもマルクスが商品を端初としてその二要素の分析からその展開をはじめているように、教授は疎外に対するマルクスの第一規定から論理的な体系的展開を試みられるのである。

従って私が考察の一つの焦点とした「自己活動的対象化」としての労働と疎外の関係も、疎外された労働を規定してその一要素として本来的な労働行為そのものを考察し、その労働行為そのものうちに疎外の可能性を規定してゆかれるのである。

すなわち、「彼の本質的な生命ないし生活を、対象的生産物のうちに自己表現すること」であったものが、「この対象的生産物が、その生産者に疎遠なるかぎりでは、彼の生命ないし生活は、自己自身のもとから去ってこの生産物のなかに存在化してしまったものとなり、従って疎外された関係におかれた」ということになるのだが、教授はマルクスの規定する疎外の「原理的理由」としての「対象性」をさらに突っこんで次のように分析される。すなわち、労働生産物が彼の対象としてまず「(a)生産する労働者に対してのみでなく、一般的に、われわれの意識の外に実存し、実在的な因果関連の一環として自然必然的に運動し、われわれの主観的意志に、したがって生活行為にかかわらず、それ自身においてあるものである、」ということ。このことを論理的に規定して「対象と意識ないし行為とが、外的に差別されて相互に無関心の関係にあること」とされる。更に、「(b)この自然必然性のもとに自己運動する自律的な外的対象は、往々にして、われわれの生活を脅かし破壊する、にもかかわらず、われわれの生活は、自然対象の因果的な必然性に依然せざるをえない。」これは「差別性にある両項が、相互のあいだの同一性の契機を規定的に定立した関係として、対立の関係にある」とされる。しかし、私はこの論理的規定について少し疑問をもっている。このような労働行為における人間と対象の関係を、教授は労働市場における労働力という商品の所有者でありこの商品の販売者である労働者の貨幣所有者との関係が「自己意識ある自己活動的な人間商品」の関係であったのに対して、「労働人間」を「単なる労働力」と「労働力の商品化」(清水)

「働人間」たらしめている「向自有的自己関係」は、単に「観念的な自己意識的向自有ではなく、自己意識する以前の純粹に生命的な自己関係」とされるのであるが、このような生命的過程にある人間は労働対象との関係においても「相互に疎遠な外的差別の関係は、労働生産物が生産的労働者の自己表現であるというこの直接的同一性のなかに、規定的に定立されるとすれば、同一性における差別という関係、すなわち対立という関係を成立せしめるであろう」とされるのである。しかし、私はマルクスのこの「生命の自己表現」としての労働は、その本質において自己発展的なものとして捉えられているのではなく、自己対象化と自己回復とはあくまで非連続的な人間行為として捉えられているものと考えるので、「労働」の規定そのものから差別対立の要素を展開的に規定し、更に「(c)労働生産物が生産物労働者を敵対的に圧迫するという矛盾関係にまで、進展する論理的な一般的可能性にある」とされることに関して納得できないものをもって、教授が、きびしく論理的な一般的可能性といわれ、決して必然性とはされぬのであるが、それでもなおかつこの労働のヘーゲルの、過程的把握は『手稿』におけるマルクスのものとしては了解できないのである。

しかし、次に「この社会的に現実的な矛盾関係の成立するためには、これに、さらに何らかの社会的条件が加わらねばならない」としてその説明を後節に譲られるわけであるが、ここにおいて私の問題の焦点を確かめることとなる。

それは、「人間が彼の類的存在から疎外されることからくる直接の帰結は、人間の人間からの疎外である。」とマルクスがいつているものの後段で、教授が労働疎外の第四規定とされているものについて追求されている。教授は、これを私の予測に反してヘーゲルの「或る自己意識に他の自己意識が対立する」をいう論理が前提され

ている、とされ、『精神現象学』の「自己意識」を中心に驚くべく綿密な考察を展開しておられるのである。⁽¹⁾

私はこの頃のマルクスが充分な認識にたつてはいなかったにしても、とにかく疎外された労働として捉えているものは資本主義的自己疎外であることに間違いない以上、これを『精神現象学』によって理解することは彼自身を追体験しその思想形成過程そのものにおいて理解しようとするのに役立つという以外にはあまり意義を見出せないのであるが、この「人間の人間からの疎外」を自己意識、さらにこれを「主と奴」の論理のうちにも解明の鍵を求められるにいたっては私はいよいよ疑問を強くせざるをえない。

私はこの疎外の現実過程の鍵はあくまで『資本論』の価値形態の展開において学びとらねばならぬと考えるし、マルクスが『手稿』の諸規定で疎外構造を完成した論理性をもつて把握しえなかつた秘密を、類的存在という直観的人間像、社会像を基礎にして人間を捉えたことによるものとして解明しなければならぬものと考えないわけにはいかない。

もとより、教授の深く、精力的な思索の真底には私の非力をもつてしてはとて把握が届かぬであろうことを遺憾とするものであるが、徹頭徹尾ヘーゲルを投入しての厳密きわまる疎外構造の解明の意義を未だ充分に受容することができないのである。このことは、教授が労働疎外をどこまでも労働主体から展開しようとされて、人間関係からくる規定も労働行為と人間の意識の展開にてらしながら解明しようとされていることに結びついていゝる。これはまた、教授が、「単なる商品人間」の論理構造を、『資本論』の第一巻第四章を手がかりにして解明されながら、これをむしろ「流通過程における貨幣の普遍的媒介性」による表面的な事柄、換言すれば「生産過程における『労働人間』の行為そのものにおける自己矛盾的な自己媒介が現象的實在の表面にあらわれた事柄

にすぎない」として「労働過程に展開される疎外」に比べて二次的なものだ⁽³⁾とされていることにも結びつくが、これら二つの疎外の構造を峻別して展開された的確さには敬服しながらも、尚これらを相関的な統一において把握されている現実的賃労働者の論理構造が不明確ではないかと考えると共に、この理論構成の根ざすところは、教授の一貫した労働主体の立場からの積極的な体系構成ということであり、教授の『手稿』把握が『資本論』を地盤とする経済哲学原理とも積極的に結びつく所以をわれわれは理解しうる契機をえたのである。

また、教授が『資本論』の始元について、その端初商品のもつ意義を主体的労働者の立場との関連で究明しておられる諸論考も、教授の経済哲学の原理と科学論、方法論との関係を示す鍵であるが、ここでも上からの私の問題点とはつきり接触する。

教授は端初としての商品が、ヘーゲル『論理学』における純有のように無規定的でなく、媒介された定有としての商品であるのに、それがなぜ「商品としての規定性のままで直接的であり」うるかを考察しておられる。そしてヘーゲルの始元に関する規定をあえて外的に適用されながら、マルクスに於ける立場のこの唯物論的止揚を認識論的にも確認されることによって「現実的人間が商品として存在する場合、この商品、すなわち、この人間商品は、学問的思惟の端緒でなければならぬ」というより、深化した命題に到達される。そして「端緒的商品が賃労働者であるべきだとする」この命題にたつ場合にはじめて「その端緒は賃労働者の主体的な哲学的自己認識の出発点となりうる」ことを解明される。すなわち「現実的人間の本来的思惟の出発点」⁽⁴⁾がここに自覚的に提起されることになる、といわれるのである。

私がここで十分に納得できない点は、この向自有としての賃労働者の自覚的立場が積極的、原理として『資本

論』の基礎におかれることは、基本的な哲学的立場としてのみならず、科学としての『資本論』の展開においても賃労働者の主体性、自覚を措定することとなり、自己増殖する価値としての資本の歴史、主体性を曖昧にし、「実践的直観」の立場が認識の積極的原理ともされることによって、却って資本主義という歴史的社会的純粋に原理的な解明を妨げる危険をもたらすことになりはしないか、ということである。

われわれは、教授の徹底した実践主体の立場からの、資本主義における賃労働者の階級自覚の原理解明から真実なる主体的哲学を学びとると共に、教授が労働主体の総合的展開の構造を、価値の形態の展開、価値の自己増殖過程との全体的構造において解明される労をとられることを切に待ち望むものである。

われわれはしょせん時代の子である。しょせんなどというより、むしろわれわれは現実に積極的に踏まえて学問を、実践をすることによってのみ真実を語りうるというべきであろう。われわれがマルクスから学びとるものについても、徒らに彼に忠実な追思惟のみに沈潜することのうちに、根本的な問題とそうでもない問題とが見分けられなくなる危険がひそむことを知らねばならぬ。われわれは、マルクスをマルクスとして受けとるに当っては主観の混入を極力警戒すると共に、現代のわれわれとして、「マルクスにおける生きたもの」を把握する主体性をもたねばならない。少し変な云い方だが、われわれはそこで「もしいまマルクスが生きて自分と共に考えていたらおそらく私の考えを肯定してくれるであろう」というようなものを自分の内面のどこかにきびしくもってあれば足るのである。梯教授の哲学的思索もまさしくこのようなものとして終始練り上げられてきたものである。そして教授は、現代における実践主体の立場を哲学的に原理づけ、それを『資本論』における賃労働者の基本構

造を主体的に把握することによって果されたのである。私も賃労働者の主体的自覚はまさしく教授が概念的に解明された構造につぎると考えるし、この点で深く啓発されてきたのである。しかし、『資本論』の概念的自己展開が主体的立場、教授のいわゆる「実践的直観」の立場から捉えることによって果されるものとは遺憾ながら考えることができない。

教授は『資本論』の理論面でも「経験的な科学の面と、概念的思惟の自己展開という哲学の面とが区別され、しかもそれぞれの区別された面が同一性にあること」を説いておられるが、科学の面を経験的な側面にかぎられるのはどうしてであろうか。⁽⁵⁾教授のこの見解は一貫しており、このことは『資本論』の downward process を彼以前の経済学の諸説を批判的に分析してゆく科学的研究の過程とのみみられることも密接に関連しているが、上向的過程を哲学的な概念展開過程を本質的な中核としてみられる点とともに、私の納得できぬことである。『資本論』を原理的に捉えるとき、それはまさに「概念的思惟の自己展開」の性格をもった論理的体系となるが、それをことさら哲学の面とよばねばならないものであるか。古典経済学や現代実証主義に対する科学観から科学の本質を規定することは、マルクスにおける科学（彼の場合 *Wissenschaft* を、他の悟性的諸科学と峻別する意味において特に「学」と訳してもよいのだが）の本質をあえて見あやまる危険をつくることにならないであろうか。教授の経済哲学によって確立されたものは、賃労働者が階級的立場（疎外された主体）を自覚することによって、この人間関係を階級構造において革命しないわけにかぬという基本構造である。ところが、教授の説かれるところでは、この主体的立場から捉えられた基本構造の把握が、しばしば客観的現実構造の認識と学的立場を一にするものとなり、概念的自己展開の主体が労働の主体であるという根本的立場が貫かれるため、客観的な資本主義経済構造の原理的

認識がその客観性を浸される危険をもつことにならないか、という危険をわれわれにいだかせる。たとえば、教授においては『資本論』が資本主義の産業資本的段階における下向・上向の統一として捉えられ、帝国主義段階においてはこの段階における下向・上向の統一としてその体系的把握がなされるべきものとされているようであるが、『資本論』の原理はたとえ現実が帝国主義段階であってもそれが資本主義であるかぎりその基礎原理である筈のものと思われる。教授におけるこの間の連関の説明は必ずしも明快でないように思われる。

賃労働者の主体的自覚は、経済学的には商品化された労働力主体の自覚(人間の能力、可能性を客体的物質力と同一のものとされ、商品とされていることの自覚)であるが、これはまことに『資本論』における労働者を、実践主体のうち哲学として獲得すべき基本構造であるといえることができる。

しかし、資本主義的矛盾のこの基本構造を主体的に把握し、実践的立場の基本的自覚にたつということ、いわば「現実的実践の基本的条件」といふべきことは如何に関係するのであるか。ここで現実的実践といったものは、われわれについて具体的にいえば、現代資本主義の現実にたつての社会的実践である。あるいは、このような次元でのことは哲学的に把握すべき枠をこえているということになるのであるか。私は、この「現実的実践の基本条件」を客観的にわれわれに与えるものが『資本論』であり、現代のわれわれも『資本論』をマルクスによって遺されたものそのままではなくとも、このようなものとして徹底して読みとるべきであるかと考える。このとき、教授が賃労働者の「資本主義的自己疎外の」自覚として解明されたものは、いわば「否定的理性の体系」としての経済学に媒介された現実的実践主体として実現されるのであって、もしここに「否定的理性」とよんだ「資本」(自己増殖する価値)、を歴史的主体とする体系の独自の意義、科学としての意義を看過する危険

を伴っているとすれば、「実践的直観の立場」は一の根本的限界をもっていることになるのではなからうか。「実践的直観の立場」のもつ「非連続」面、ないしは労働者の主体性の強調が、資本主義の現実的構造を客観的、過程的に捉えることを妨げることにはならないであろうか。

従って、『資本論』のうちに労働者の主体的自覚の根拠を確認しても、それはあくまで哲学的展開としての『手稿』の立場が「否定的理性」の体系のうちに如何に止揚されたかたちで生きているかということの確認なのであって、『資本論』自体はどこまでも歴史的社会的原理的認識として捉えられることが、その積極面であろうと私は考えるのである。

ここで私は、自分の全体的見解の骨子を述べねばならない。これは、もとより未だ荒げつりのものであるのだが、教授に対していろいろ疑問の点を提出し、教示を乞う上において、自分の考えを赤裸々に開示することが義務であるとも考えられるからである。

私は、マルクスの哲学的立場は、労働の把握を基礎とする実践の立場だと思う。彼の唯物論は、フォイエルバッハに関する「第一テーゼ」に示された意味における実践的、主体的の哲学でなければならない。これはフォイエルバッハへの受客的感受性、直観の立場を実践主体の立場に止揚したところのものである。従ってこの立場からすれば、概念が主体であることはない。概念はあくまで主体の対象化、その述語面のものでして捉えられる。この主体的立場からの実践的な直観が捉える現実には、自己の対象化と自己回復であり、また自己の疎外の直観および分析とその克服への意欲である。この立場は概念、ロゴスを有とする立場からみればまさしく無の立場、質料の立場である。私はマルクスがフォイエルバッハから受けとったこの主体的自然の立場、質料の立場は死ぬまで彼の根本

的立場として貫かれていると思う。

しかし、社会的存在としての人間の現実を全体的に、それ自身の本質において捉えようとするとき、このような質料的主体の立場は一の決定的飛躍をとげなければならない。実践的主体の直観において捉えられた自己の疎外構造は、疎外させるもの、をロゴスの主体とした徹底的な確認を要請する。

しかし、この人間を疎外させる本質としてのロゴス（資本、価値）の体系は、哲学の体系ではない。それはロゴスの自己批判的展開の体系であり、経済学に於ける観念論批判の体系である。それが哲学の体系でないことを強調する所以は、この体系が人間主体の立場から積極的に展開されるものでなく、歴史的に始めをもち終りをもつ疎外的世界の体系だからである。

いうまでもなく、右の主体的立場からする哲学的自己主張、疎外に対する克服の意欲の表現が、マルクスにおける『手稿』の段階のものであり、この主体的立場から必然的に要請される実践のための媒介として独立の体系をなすものが『資本論』である。経済学的認識は、その最も純粋な原理的認識から具体的な現状の分析にいたるまで徹底的に主体を疎外させる本質の側から、どのように回避しようとしても回避できず、どのように自己調整しようとしても調整できぬような矛盾以外はいっさい矛盾と認めないという執拗さをもって貫かれねばならない。実践的主体の意欲のために、資本主義の自足的原理をもあまいものにねじ曲げることがあってはならない。

第一の主体的立場が実践的かつ直観的であるのに対して、この理論的態度は、あくまで主体的立場にたちながら、理論として徹底した否定的理性の立場を貫き、ロゴスコそ本質であるという自己主張を、労働主体を包摂しつつしながら展開しようとする価値の体系”として展開される。そしてこの客観的認識をどこまでも客観的な

ものとして自己に媒介させた主体こそが、現実の主体、すなわち理論に媒介された実践的主体ということであればならない。

しかしながら、この三つの段階をヘーゲルの即自、向自、即且向自、または直観、理性、思弁と結びつけてはならない。主体の立場はあくまで実践の立場、対象化する立場であって対象化されたもの、概念化されたものであることは許されない。だからヘーゲルのさまざまな三肢組織と比較して理解するにしてもそれはあくまで比較による理解のたすけというだけのものであって、実践主体の立場そのものは過程的、連続的な展開を哲学として展開できないものとされなければならない。ここに、私も客観的な学の体系としてその論理に過程的展開を認めながら、なお主体的立場としては徹頭徹尾非連続の立場として過程ないし体系的自覚を許さぬ、という意味で梯教授と全く同じ受取り方とはいえないであろうが、西田哲学からはつねに根本的な指針を受けている。

こうして、私もここに主題に関する要約的な叙述をすべき段階にきたようである。

『経、哲手稿』におけるマルクスの疎外された労働の分析の意欲の表現は、あくまで自己疎外させるものを未だ発見できなかった段階における直観的表現を根本性格とするものであり、この主体的立場から原理をたてる疎外論的認識をもってしては、如何にしても疎外された労働の基本構造は捉えられないこと、このことはこの主体の立場を学的認識の立場へと全く「死の飛躍」 salto mortale ともうべき転化をとげなければならぬこと、そしてそこにおいて労働の疎外は、労働力の商品化、人間の自己対象化の能力の物化という構造でその全体系のうちに位置づけられうるということである。

- (2) 同 書。
- (3) 同 書 三一三頁。
- (4) 同 書 第三篇 第一章 第一、二節。
- (5) 同 書 三六八―三九〇頁。